

茶室覚書

織田有楽 愛知県 有楽苑 国宝 如庵
二畳半台目下座床 じょあん

外観：入母屋、切妻造り混合。柿葺屋根 躰口を正面に見せず 躰口前を土間庇とし玄関扱い。土間庇の袖壁に高めに丸窓。
床脇：三角の鱗板を入れ壁を斜行、茶道口からの動線を考慮。
天井：中柱通りで二分躰口側 化粧屋根の駆込天井、突上窓。
手前座、客座側竹棹縁の平天井。
腰張り：古歴ふるごよみを張る。洞庫の襖、中柱で高さの違う窓。
腰張の古暦の壁面構成が際立つ
有楽窓：点前座脇壁にある二つの連子窓の竹を詰め打ち

- ・織田有楽が建仁寺正伝院を再興した際、隠居所の書院とともに造った数寄屋。ここで晩年を過ごす。
- ・点前座は台目向切 台目下座床。
- ・炉先の前角に中柱を立て板をはめ、火灯形にくり抜いて手前座に明りを集中、空間を引き締める。板で隔てた半畳はゆとりとなる。（一般に中柱は台目構えか道安囲いに立てる）
- ・刀掛をやめて土間庇の突き当たりの部屋に客の持ち物を置く
- ・江戸時代から「有楽囲い」「筋違ノ囲い」「暦張の席」呼ぶ

